

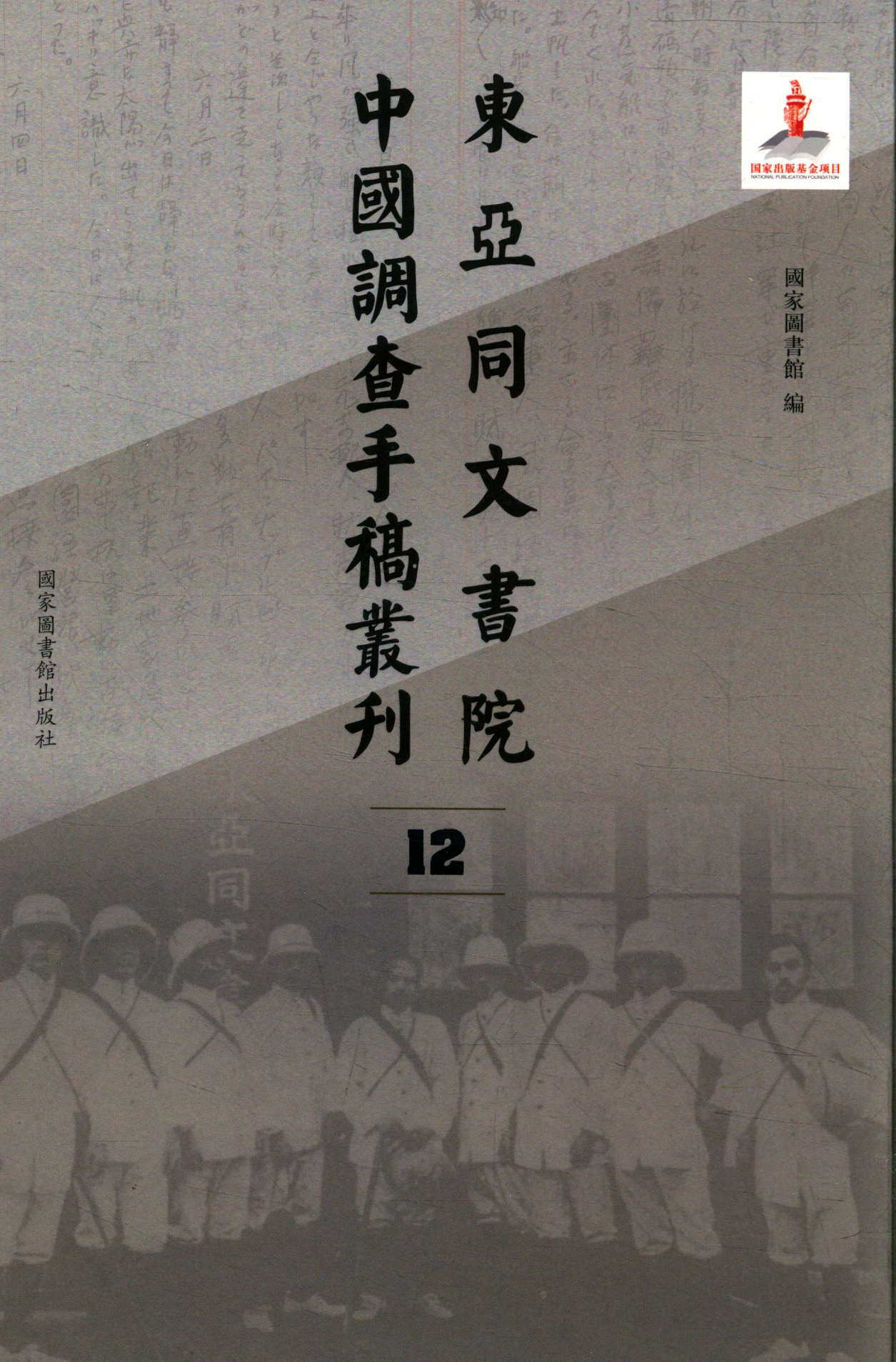


國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

12

國家圖書館出版社





國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

12

國家圖書館出版社

第一二冊目錄

昭和三年(一九二八)旅行日誌(第二十五期生)

津留直

第七卷第一編

.....一

寺田孫次

第七卷第二編

.....四五

中倉倫平

第七卷第三編

.....九一

寺崎祐義

第七卷第四編

.....一四一

小濱繁

第七卷第五編

.....一八五

辻正一

第七卷第六編

.....二二七

稻川三郎

第八卷第一編

.....二七三

和田四郎

第八卷第二編

.....三六七

松田博

第八卷第三編

.....四三一

根岸忠素

第八卷第四編

.....四九三

長谷川幾吉

第八卷第五編

.....五七一

昭和三年度

大旅行調査日誌

丙午期生

清島直

This image shows a single sheet of white paper with horizontal blue or grey ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There is no handwriting or printed text on the paper.

七卷

旅行

調査日誌

序言

調査旅行を開始してより一月有餘、其間を諸事目的
完徹せしは我等の甚だ幸とする処あるも、余の担当せる
交通状態に對し、實際吉林より龍井方面に於て、
者少之又所減、吉林通の少なるが故に、新蒐集の少から
ず、苦心し、特に現時、我の朝鮮の親睦を促さるる吉慶
鎮迄に付いて、概ね附せる理由を以て詳細に得たこと、
は貴重感あり。然し余は出来る所の多き人の接し、
面の高説を義はりたる積りあり、以下説明、内容は主
要点とするも、日誌の順序より、概略を呈さん

五同圖

書院

五月三十日 晴

午前十時我々所へ云名は四年了書院生也の修業要
をふべき大板の力一歩を爆発竹と院歌の中を跳む
午前九時朱教授等友又送られ大連汽船の便乗し上
海を出る。波静かりしは冬の苦痛を移りけし四圍
の風景を眺め愈々船は進む
一歩くと青島は近き。

五月三十日

午前一時次青島に着。出帆の都合上儀が二時分の
青島に見望は至る所金だ。青島砲台見望するの機
の為免る高青島令即の大体を視はる為高島車に乗
し廻り走り最後高島神社に降す。海軍事件を

故の生れあるが故に我が陸海軍を以て望まうに此の
此知子彼々と記念をたすも取り難くありと。

各団体横を押し進むところを数人の人々は海軍大臣の
送るべく西を乗す。船の離るゝときは万歳の声は天地を
震動せんやう。異様な感激の中へ愈々青春を思い出す
夕食はアツキで妙本殿の飯を多量に食ふと會々。
海軍事件を故の事情に付し諒解を乞ひ以て高潔を承る。

六月一日晴

本海軍に對し華を以てする大建碑願ひ着く。

殊多る先帝の御迎へを乞ふ事華所願ある道路、並本の
るも縫ふ先帝諸人の御世に於てした海軍部會入旅
装を説く。先帝御前研究會を由り命令報を得て歸る

月食日の君へ大連一中の藤垣さんから電話がかかる。〇と下
 とそれから私の三人は早速彼の宅を訪ね。藤垣さんは例の
 怪本棚を出して笑はせる。二階の書斎が居るからゆつゝしとん
 ちつせ、ゆしやお湯をいって来る爺人。奥さん顔も見なしとん
 人だろつかと横上り上る見れば一昨午卒業の本付さんが居られ
 る。はあ之が奥さんか。笑はせやかるな。早速引かれ大連
 浪波通を漫歩あり、随分馳走のする如く十時頃家へ
 帰る。

六月二日

早朝より我々六名は皆鉄調課へ足を運ぶ。先ず中浜
 氏を介して各調査課目より花じ調査を述べる。内急事
 情、或は吉林一帯の事と殆んど白紙であるに付概し通り

東亞司書局蔵書

の責任上將又調査を担う關係から早速この道に精通
して居られる竹内氏を訪ゆす。

先が吉林より龍井和をえる交通状態、馬賊の状況、
等々を付辭知る義。其時既にこの馬賊を偶々
に歸着し易々とかなつて居る。吉林中府の事件を扱つてもある
し馬賊の在陞を扱つても愈々其の居る所は成多々
人の意見を以て之を以て目的とし上り下り邊境を
他の諸先等も之々の事情を以て之を以て中江氏の如きは
我々の吉林より老歌傳へるの力には寧ろ暴陞である
我々の生命を以て之を以て根拠する中江氏を以て。生命の
保障も亦（これに依りて我々の為に預け力に断念を極力
められる。然し其の力に力が出ずるとすれば我々は
大害である。道を通じても（これは）
幾分か知られればすといふ

ふ
奥の角に之をたしめ断室の下の止を造りて調査をせし
色々書物をあさり吉林より急ぎ急ぎの事情を知らぬ程に
この不安は益々多きで其賊の横りの土地と推測されたと
なり。名取四時帰余より着る。

六月三日 晴

七時起床。折順川の支所をすぎし早連人の流を立つ
静かな順順の所は心算し淋し感をおこし入りに日の残照を
ふはし感をおこす。黙るありと立ちふ二台の馬車を駆り残
跡巡りをしめる。先ず早連山へ登る。小高い塚の様な山で
其処で一万石余の血を流したと云ふ事も多しと云ふ。案山を
の群れある説明よりなり乃本條侯恩子の死地も教へられる。
只残骸のみが激然と思はれる。感懐并量、是れより南東へ

六月五日 晴

八時三十分の汽車で大連を立つ、北道小をちながら丁孫嶺人
 節藤を思はせる標を越えて居る。清水元龍の廣虎、然し
 一見肥伏の地とは思はれぬ。地上すゝみ随て清水人狼狽の風
 俗かゝる。ゆる。

午後三時尋々義、昨日の作霖の事を思ひ浮べた
 冊師園司令部とある處に大丸旅館が落ちて居る。軍運ボ
 ーイの宿ありより作霖電難地を見えり。雨側の山々
 間々此処あり而も次明市に及ぶと大隈ある村をとりし
 巧妙なる畫筆の生をみえ。

奉天市街の景、塵土大に散る。金と目にはあかぬ
 女は手はうエーにさし出す。既る。

日は暮る。本旅館が司令部とある處を一面の情報が

年子取る如く休める故色々一紙を穿つて秋風の如き何れ
に聴く。特赦而も一糸乱れざる日本軍の行動を感奮す。

六月六日 晴

各人自由行動を取る事とし早速訪録地大事務局知子に
酒を是輩の寛い色々の便宜を受え。然し和の調査としては
どうも吉村子にかなはぬ情がわたり兼ねる為免る角吉村義
孝を伴ふべと色々の説を以て之を事務知と云ふ盛京時報
社の佐原篤介先生に説得す。在朝鮮人の盛に付時流を見
つめよとの下も當々たる説を以て

尚書次副領事林漢龍氏に説得し以て高説を兼ねる。

元月七日 晴

七時の汽車に乗り廻順見物あり之

九時境順義

河鉄地より各処を訪問し先此山山下に於て紹介あり山麓坑

見物に出掛之。露路を掘の北観言山人云ふ、秋は此の山麓坑

も尚候事あるを賞中。晝食長束郷銃あり之。

午後先此久我山下山崎三氏より河鉄事各知念を以て

所馳走あり元時迄の汽車を乗るに白木

元月八日 晴

本教人藏民氏を訪問す。

奉天の現情を聞き及ぶ。訪念作の時局の爲北陸

見物を止りしに於て午後奉天市中見物。